

人生に笑いを！ 海外で見つけるユーモア

1. アフロの正しい使い方 .....	1
2. 雲の上で鑑賞 .....	2
3. 日本人にしかわからない関西お笑い .....	2
4. トスカーナとネホリーナ・ハホリーナ .....	3
5. マイ・ボディガード .....	5
6. スピルバーグと黒澤 .....	6

## 1. アフロの正しい使い方

本日マーケティングの授業でヨーロッパ産ビール会社の CM を見た。

コンサート会場で観客が総立ちになっている。中の一人が何か物（財布？）を床に落とす。あたりは暗いのでライターを取り出し、明かりをかざして床を探す。

このあたりから私、先が読めてしまったので可笑しさをこらえる。この観客の頭はアフロヘアなのである。映画「ウォーターボーイズ」で使われたようなアフロの使い方をすることに違いないと決め付けていた。

ライターで床をてらしたおかげで目当ての落とし物が見つかり、確認のため財布とライターを頭上にかざす。

ここで私、もう間違いない、例のあれだ！！と嬉々としてスクリーンを見つめた。

これを見た周りの観客が、新たなペンライトの代替か？なるほど、これはかっこいいと皆がポケットからめいめいライターを取り出し、左右に振ってペンライト効果を演出しだす・・・ここで会社のロゴがでる。

え、これが落ちか？と私は愕然とする。何のためにアフロを使うのだ？アフロヘアの役者が出てきて、ライターを持ち出したとしたら、それはうっかりアフロに火が移り、アフロが燃え出すという落ちだろうと、私は心中穏やかでなかった。アフロの演出効果はその巨大なシルエットのインパクトにあり、せっかく使うのなら燃やさないと！と考えている自分に気付いた。

この発想は日本人特有のものか、あるいは関西系なのか、はたまたイタリア人化している自分のオリジナルか・・・、いかんいかんと首を横にふりつつ、**anyway**、とりあえずは目先の試験のことを考えるしかないなど、自分に言い聞かせた。

## 2. 雲の上で鑑賞

この1年ほど、映画館で映画を見なかった。テレビやビデオ、ましてやDVDを借りてみることはほとんどしなかった。けれども、わりと多くの映画を見ているような気がする。どこでか？ほとんどが飛行機の中である。雲の上の飛行時間中に英語・イタリア語の勉強も兼ねて、着々と新作映画をこなしていたのである。

外国語の勉強をしようと思うと、外国作品を多く見てしまいがちである。が、しかし、実は日本映画の英語字幕というのは意外にいい。「お世話になります」、「頑張りましたね」等日本語独特の言い回しを、いかに英語で表現するか、他人の智恵を拝借することができるからである。

「半落ち」**Half confession** は日本語のタイトルでは、何のことやら全くわからなかったものが、英語訳を見て初めてピンと来た。というより、内容がよりクリアになった。たとえば自分が地獄におちようとも、人をかばってしまう、日本人の美德がテーマである。アルツハイマーで病んでいた妻を殺した警察官、彼の自白から映画は始まるのだが、出頭までに空白の時間があり、その間どこにいたのか、何をしていたのか、彼は口を割らない、まさに「半分のみ告白」である。

寺尾聡、樹木希林、原田美枝子、名優がそろっており、演技の抑え具合が丁度いい。フライトで爆睡しようと、私はメガネをかけていた。ミラノに戻って、隣家の老夫婦に挨拶に行ったら、ダンナの方が、涙で汚れた私のメガネを拭いてくれた。日本映画を見てボロボロ泣いたのだと私は彼に説明した。そんなしょうもない話をふと思い出した。

「バーバー吉野」も面白かった。日本映画は「寅さん」しかり、「ウォーターボーイズ」しかり、クラシックをととても上手く取り入れている。女物の着物を着て、小学生を追いかける変質者が、陸橋に仁王立ちして歌うのはプッチーニである。どういうわけか、少年が恋ゴコロに目覚めるときのBGMはラ・ボエームのムゼッタのワルツが使われることが多い。

## 3. 日本人にしかわからない関西お笑い

浜ちゃん主演の「明日があるさ」は大いに笑った。外国にいて困るのは笑いの少なさである。私は外人の友達にまじっても、「おもしろい」と定評？がある。しかし、残念ながら、すべてを日本語で語ることができる私はもっと面白いのだ。それをあなたに伝えることができないのが、本当に悲しい。人からユキは面白いと言われるたびに、私はこう答えている。

外国語でのジョークは笑いについての共通の認識、それを理解する語学能力が必要である。日本語でのギャグを外国人に理解させるのも同様である。至難の業なのだ。したがって、「笑い」という観点からはフラストレーションが溜まることが多い。時折、私も含め「天然」系の人がいて、言語を越えて、外見ににじみ出るコミカルな感じで笑わせてくれる人がいる。異国で暮らすには、このような笑いのリソースになる人をどれだけ持てるかが鍵ではないかと思う。

そんな意味で、この「明日があるさ」は大いに笑った。飛行機の中で、お休み時間になり照明が消されていたが、人目をはばからず、大笑いしてしまった。笑いながら同時に、ああ、こういう風に英訳するのかと勉強させて頂いた。だが、どうやっても、ダウンタウンの関西弁のしゃべりは英語に落ちない。これを理解できるのが、日本人の特権だなあと思った。

さて、アリタリアに乗っているとイタリア映画を見ることが良くある。イタリア語勉強術「ネホリーナ・ハホリーナ」では書かなかったが、イタリアの美しい風景を堪能できる映画が「トスカーナの空の下 Under the Tuscany's Sun」である。主人公が、ああ、ダイアン・レインだったのか・・・と気付くのに30分くらいかかる。

日本での「負け犬」ブーム、アメリカでヒットしたTVドラマ「アリーマクヴィル（日本タイトルはアリーマイラブ）」、「Sex and the City」からも伺えるように、30台、キャリア独身女性は先進国の深刻な問題のようである。

すべて英語でみていたので、私の理解もイマひとつなのだが、ダイアンレインは夫と別れ、傷心イタリアのフィレンツェ、トスカーナ郊外で過すツアーに参加するのだ。荒れ果てた貴族の別荘という物件を、たまたま見に行くことになり、弾みでつい買ってしまふ、という内容である。

#### 4. トスカーナとネホリーナ・ハホリーナ

イタリアに暮らす私としてはイタリア家屋のお粗末な点はイヤというほど見てきた。であ

るので、このイタリア物件購入者のダイアンレインの気持ちは良くわかってしまうのである。買った方がいいが、あちこち手入れしないと使えない代物なので、左官工を雇って大々的に手直しをするのである。

雇われるのはイタリアに増えてきている移民、東欧からの労働者である。この映画ではポーランド出身の若者、「教授」とあだ名されるインテリ風の男性、そしてメガネが似合うアーティスト風の男性である。

この映画の本筋はイタリアで発見した新たな人生であり、イタリアの数々の美しい風景が一つの見所である。だが、フィレンツェもアマルフィもローマも、だいたい、ああ、あの辺で撮っているのだなあと判ってしまう私としては、もう少し別のところに目が行っていた。

主人公と典型的イタリア男マルチェロとの恋愛話も、ポーランド出身の少年とイタリア人少女との恋愛もそこそこ良く撮っている。が、変わり者の私から言わせてもらおうと、ホントにいいシーンはこのようなシーンではない。

この映画で一番いい、泣けるシーンは別にある。

このトスカーナの別荘改築は一大イベントであり、大きなプロジェクトである。この仕事の最中、ダイアンレインは雇い主でありながら、プロジェクトリーダーとして活躍する。降り注ぐ太陽の中で、改修作業を行う。お昼には大皿でパスタを作り、左官工達（少年、教授、メガネ君）とワイワイいいながら食事をし、その後皆思い思いにシエスタをしている。雨が降れば、左官の仕事はお休みである。本を読んだり、楽器を弾いたり自分なりのスタイルで過している。イタリアの豊かさを感じさせるシーンである。

イタリアは階級が明確であり、労働者は生涯労働者である。ブルーカラーとホワイトカラーは明確に区別されている。しかし、どんなに貧しくとも、太陽の恵みがある。手をかけなくても葡萄が実り、トマトは赤く熟し、オリーブは実を落とすのである。他人と並ぶために、しのぎを削って、わき目も振らずに額に汗して働く、という必要がないのである。この映画ではイタリアの風土がもたらす豊かさも味わうことができる。

いよいよ改築が完了する。ダイアンレイン、少年、教授、メガネ君、それぞれ万感の思いで別荘を見上げる。中庭で記念撮影を・・・とシャッターを切ったその瞬間、この左官工の一人メガネ君が手で顔を覆って泣き出すのである。女主人の肩に額をつけて涙するのである。

いいシーンである。白黒の映像がよけいに泣かせる。改修作業のスナップショットを見れば、私の目には明らかである。何が明らかなのか？この左官工、メガネ君は自分の雇用主の女主人が好きだったのである。いい年をして、単身アメリカからイタリアに渡ってくるのだから、いろんな過去があったのだろう。けれども、前を向いて生き生きとしている彼女は彼には魅力的だったのである。身分の違いから、これはすべて彼のひそかな思いである。それだけに、彼の隠して隠して、隠し切れなかった涙は、本当に切ないのである。

ハリウッド映画は「おおざっぱ」という印象を良く受けるが、イタリアを題材にしているせいか、細かいところが意外に「よくできました」という印象の映画である。

## 5. マイ・ボディガード

先日、久々に日本のTV番組を見た。高校生がハリウッドスターにインタビューするという企画であり、相手はスピルバーグ監督、トム・クルーズ、ダコタ・ファニングである。

全く意味の無い仮説であるが、私にこの役が回ってきたらどうするか？である。インタビューは英語で聞かねばならない。これはテレビ番組であったので、キャラクター的に使える高校生が「質問係り」の大役をつとめていた。前日徹夜でアンチョコを作っている彼をみると、自分の高校時代の英語の勉強を思い出した。当時の私と今の私の違い自覚した瞬間である。

ダコタ・ファニングはハリウッドの「安達ゆみ」かと思うほどの名子役である。

「アイムサム」はトフルの勉強を黙々と続けていたときに、数回繰り返してみた映画である。ダコタ・ファニングはサムの娘ルーシーの役をやっていた。ビートルズの歌を上手く使ってるなあということと、ショーン・ペンの演技のうまさの方が印象に残っている。

これも雲の上でみた映画であるが、「マイボディガード」の方が、彼女の味が良く出ていたような気がする。大富豪を狙った誘拐事件が頻繁におきるメキシコで、富豪の娘の役を彼女が、ボディガードをデンゼル・ワシントンが演じるのである。気のせいかもしれないが、お互い「地」でやっているという印象を受けた。はじめは「ガキのお守りは勘弁してくれよ！」というノリのデンゼル・ワシントンが、「エースを狙え」の宗方コーチのように、ついつい彼女の水泳スキルアップの面倒を見たり、ピアノレッスンで情にほだされたりしてしまう・・・という辺りが見所である。

デンゼル・ワシントンの英語は好きである。「フィラデルフィア」で彼が法廷で使うセリフ

は、私もグループワークの時に度々使わせてもらっている。「Could you tell me as if I were 7 year boy? 7歳の子供にもわかるように、わかりやすく説明して下さい。」もともと、私が友達にこれを使うときには、その後に「フィラデルフィア」を見ましたか？と付け加えることにしている。

さてさて、「マイボディガード」では、さらに彼のスペイン語におどろかされた。誘拐されてしまった娘を血眼になって探すのだが、昨日や今日身につけたスペイン語とは思えないほど流暢に話すのである。彼が知性派として色々な役をこなすのも納得できる。

話をもとに戻して、私がダコタ嬢にインタビューするとしたら、このあたりを聞くだろう。デンゼル・ワシントンとの苦労話、トム・クルーズとの合わせ方、彼女の目からみた両役者のイメージ。とても頭がよくて、カンのいい彼女であるから、将来の展望 Career Aspiration も聞いてみたいところである。

## 6. スピルバーグと黒澤

さて、スピルバーグに対してはどうか？

何はなくとも、黒澤の影響を直接聞いてみたいところである。スターウォーズも黒澤映画の影響を強く受けていることは有名である。おおかたのネタはもうだいたい使い尽くしたところだろう、それでもなお、Still 何か学ぶところがあるのかどうか？聞いてみたいものである。

さらに、世界のスピルバーグは日本の Culture をどのように理解しているのか？この場合の Culture は「文化」というのとニュアンスが違う。司馬遼太郎がかつて、「アメリカには文明があって文化がない」といった。そのアメリカの英語では Culture を頻繁につかう。この場合の Culture は宗教に根ざした信念、信条であって、その信念が目に見える形で現れた特徴を Culture と呼んでいる。

スピルバーグには日本を舞台に、あるいは要素として映画を撮るとしたら、どう作るか聞けばよい。おそらく彼のもつ日本のイメージがつかめるはずである。これはある意味アメリカの反映であり、世界の流れをつかむ上でも有効である。

さて、オーラスのトム・クルーズに対してはどうか？ネホリーナ・ハホリーナのイタリア人であったら、ニコール・キッドマンと何があったのか？本音の話をゴシップ調に聞いてしまうところである。この類の話は聞かれ慣れているし、答え慣れているだろう。典型的にステップアップをしている彼であるから、ラストサムライの前後で日本の image がどう

変化したか？このあたりの切り込みは面白いかもしれない。さらに、Strategy の教科書ではマドンナの成功が度々例として説明させる。これを前提として、トム・クルーズの Strategy を聞いてみるというのも、意外性があるといいかもしれない。